

哲學研究

第六十八號

第六卷
第十一册

文化價值體系問題 (一)

米田庄太郎

緒言——文化價值の一般的概念及び

文化價值體系研究の二方針

今文化價值の體系を研究せんとするに當つては、先づ文化價值の概念を詳しく論じて置かねばならぬ。此の語は近來學問上に於ても亦日常の生活に於ても随分盛んに使用されて居るが、併し其の意味はあまり明瞭でない。寧ろ人によりて夫れ夫れ異なる意味に用ひられて居る様である。而して文化價值の概念の明亮でないのは、敢て怪むに足らない。是れ此の概念を構成する文化の概念も亦價值の概念も、共に其の意味の随分曖昧なものであるからである。要するに其意味の曖昧な文化

の概念と價値の概念とを結合して、構成されたる文化價値の概念の意味の曖昧なるは、寧ろ當然であるのである。併し學的に文化價値の體系を論究せんとするに當つては、どうしても文化價値の概念を曖昧なまゝにして置くことは出来ないものである。吾人は先づ文化の概念及び價値の概念を出来るだけ精確に決定し、更に進んで文化價値の概念を出来るだけ精確に決定することを企だてなければならぬ。さばれ此處に之を企だつるに於ては、到底文化價値の體系を論ずる暇はなくなると思ふから、余は詳細は他日別に一論文を書いて、其の中で論述することゝし、此處には只文化價値の形式的な一般的な概念を極簡單に説述するに止めて置く。

却説文化價値は先づ絶対價値、超感覺的な或は超越的トランスセンゼンツな價値から區別されねばならぬ。文化價値は感覺的な、經驗的な實在である。夫れは超越的な實在でも、亦絕對的な當爲でもない。併し夫れは決して超越的價値、絶対價値と沒交渉であるとも、何等の關係をも有しないものであるとも云ふのでない。哲學上より云へば文化價値は絶対價値、超越的價値が實在と結合せるもの、或は超越的價値、絶対價値が經驗に於て實現せるものであると認めなければならぬ。文化價値が時間時間に於て顯現しながら、しかも絕對的普遍妥當性を含むのは、つまり夫れは時間時間に於て絶対價値を實現し

て居るものであるからである。或は絶対價値が時間内に入り込んで具體的に顯現して居るものであるからである。併し此の如くに哲學上から考察して文化價値の概念を決定するに於ては、文化價値の範圍は大に狹められて來るので、普通に文化價値と稱せられるものゝ少なからぬ部分は、文化價値でないと思ふべきであらう。されば余は特に哲學上から見て、文化價値の概念を決定せんとするに於ては、右に述べし如くに考へるのが正當であると認めると同時に、右の如くに文化價値の哲學的概念を決定するに先だち、經驗的實在としての文化價値の一般的概念を決定し、而して經驗的科學の對象としての文化價値は如何なるものであるかを、形式的に規定することが肝要であると思ふ。要するに余は先づ文化價値を經驗的實在として、形式的に其の一般的概念を決定し、以て經驗的科學の對象としての文化價値は如何なるものであるかを見定め、次に更に之を哲學的に考察して文化價値の哲學的概念を決定し、以て哲學の對象としての文化價値は如何なるものであるかを見定めたいと思ふのである。

却說經驗的實在としての文化價値は、先づ人間に依て承認されたる、或は是認されたる普遍的價値である。而して其の普遍性は嚴密に云へば事實的普遍性と規範的

普遍性とに別たれる。事實的普遍性とはつまり現實に或は事實上總ての人々に依て是認されて居ることを意味し、規範的普遍性とはつまり總ての人々に依て是認さる可きものと考へられることを意味する。換言すれば事實的普遍性とは事實的に普遍的なる妥當性を云ひ、規範的普遍性とは規範的に普遍的なる妥當性を云ふのである。但し此の場合には規範的普遍妥當性と云ふも超經驗的な、絶對的な妥當性を意味するのでなく、事實上規範的なる即ち一定の社會の總ての成員によりて、事實上承認の要求されることを意味するのである。されば純經驗的實在としての文化價值に於ては、吾人は之を一般的に規定して、一定の社會の總ての成員によりて事實上承認されて居る處の、又承認さるべきことの事實上要求されて居る處の價值であると云ふことが出来る。約言すれば經驗的實在としての文化價值とは、つまり社會的價值であるのである。而して余は此の如くに解する經驗的實在としての文化價值を、特に哲學上より超經驗的な絶對的價值に結び付けて考察し、其の中に超經驗的、絶對的價值の要素を含蓄すると認められる文化價值を抜き出し、かゝる文化價值に付て文化價值の哲學的概念を立てんとするのである。要するに余は哲學的に見たる文化價值とは、超經驗的、或は超越的、或は絶對的價值が實在に結び付いて顯現する價值、或

は經驗に於て其等の價值が具體的に實現されたるものであると考へるのである。それで余の考へる處によれば、經驗的實在としての文化價值は、其の範圍に於て哲學的に見たる文化價值よりも廣く、之を包含するものであるが、併し哲學的に見たる文化價值は經驗的實在としての文化價值よりも大に深いもの、或は深奥なるものとなるのである。

余は文化價值の概念を先づ形式的・一般的に、右の如くに規定して、大體上余の文化價值と云ふは如何なるものであるかを示して置き、尙ほ後に場合に應じて稍々詳しく説明をも加へたい思ふ。然るに經驗的實在としての文化價值の概念を、上に述べし如くに規定するに於ては、此處に余輩の先づ注意す可きは、かゝる意味の文化價值は社會學者が社會現象、或は社會的行動の實質的概念として一般に認めて居るものと一致して居ると云ふことである。少なくとも大體上に於ては、社會學者が實質的に社會現象、或は社會的行動と稱して居るものは、右の文化價值の概念と一致して居るのである。而して彼等が一時甚だ重要視せる社會現象の位階的分類なるものは、つまり科學上より見たる文化價值の體系を意味するものと見做し得られるのである。そこで余は近來文化哲學者の大に重要視して居る價值體系なるものを、文化價值體

系の哲學的研究と認めるに對して、社會學者が社會現象の位階的分類と稱するものを、文化價値の科學的研究と認め、此くて文化價値の體系の研究には科學的と哲學的との二つの方針があると考へるのである。而して此等二種の方針の發達及び其の結果を比較して、余は此の問題に對して如何なる態度をとつて居るかを、本論文に於て少しく論述したいと思ふのである。

尙ほ文化價値體系の研究に於ける右の二方針の近頃の發達を概觀すると、社會學者の研究は文化哲學者の研究よりも少く、さきに發達し、又文化哲學者が最近に至つて到達せると大體上同一の結論に、彼等に先だちて到達して居たかと思はれる。

それで本論文に於ては、余は先づ、社會學者の社會現象位階的分類論の發達と其の結果とを概論し、次に文化哲學者の價値體系論の發達と其の結果とを概論し、而して兩者の發達の結果の大體上合致する點に特に注目して、其處に余は愚見を立てる基礎を見定めやうとするのである。何れの問題の研究に於ても、其の發達の結果の合致する點は、後の研究者の特に注意す可きものである。

併し夫れに先だち余は更に、文化價値體系論の右の二方針、即ち科學の方針と哲學的方針との根本的差別に付て、少しく論じて置きたいと思ふ。夫れ余は科學の本質

はつまり實在の因果的關係を究明するに在ると思ふ。即ち科學は原因的見地に立ちて實在を説明することを其の本義となすものである。但し實在の構成的形式としての因果性は、科學の方法論的形式としては、普遍的因果性と箇性的或は箇別的因果性とに分たれ、且つ直接の目的としては普遍的なるものを把握せんとする科學と、箇性的箇體的なるものを把握せんとする科學、即ち自然科學と歴史科學とに別たれるが、併し結局因果的結合を究明するに於て科學の本質は發揮されるのである。然るに哲學は本來目的論的見地に立ちて實在の意義を究明すること、即ち實在を意明することを其の本質となすものである。科學は説明することを以て其の任務となし、又説明するだけで其の任務が終り、敢て意明せんと企だてる可きものでないが、哲學は科學の説明したものを、更に意明せんとするもの、而して其の意明せんとすることに於て、其の特有の任務が認められるのである。然るに説明は原因的見地からして成就される可きものであるが、意明は目的論的見地からして成就される可きものである。此くて原因的見地は科學特有の見地であるに對して、目的論的見地は哲學特有の見地である可きである。されば社會學者がよく其の科學者としての本分を意識して社會現象の體系、即ち文化價値の體系を立てんとするに於ては、本來原因的

見地に立ちて之を企だてなければならぬと同時に、決して目的論的見地によりて攪亂されてはならぬ。社會學者の立てる文化價值體系の學的價值は、原因的見地から立てられたものとして、如何程正當であるかによりて決定されるので、若し目的論的見地を混ざるに於ては、其の實際的價值は如何に大なるにせよ、其の學的價值は大に毀損される恐れがある。之れに反して哲學者の立てんとする文化價值體系は、本來目的論的見地に立ちて企だてらる可きものにして、又其の學的價值は目的論的見地から見て判斷さる可きものである。而して若し原因的見地を混ざるとすれば、矢張り其の學的價值が傷けられる恐れがあると思ふ。要するに余は文化價值體系研究の科學的方針は、原因的見地を生命とし、而して其の哲學的方針は目的論的見地を生命とするものと考へ、右に述べしが如き見解からして、社會學者の文化價值體系研究の發達を批判的に考察し、又文化哲學者の文化價值體系研究の發達を批判的に考察せんとするのである。

終りに學問上の體系システムと云ふことに就て少しく述べて置く。今學問上の體系と云へば先づ廣義に於ては、一定の一全體をなす諸概念或は諸部分或は諸部類が一定の原理に従ふて立てられたる一定の順序に於て、相結合し或は相連結して居ることを

意味する。併し其の順序は必ず位階的でなければ、眞に體系と認めめることは出來ない。と考へる人々と、位階的でなくとも並列的相關のであれば夫れで體系は成立すると見る人々とがある。更に體系は完結的或は閉鎖的でなければならぬと考へる人々と、必ずしもさうであるを要しない、否な物の性質によりてはかゝる意味にては體系は到底成立しないので、夫れは當然不完結的或は開放的でなければならぬと考へる人々とがある。完結的或は閉鎖的と云ふは、つまり體系を立てんとする一全體の諸部分或は諸部類は、少なくとも根本的には既に知られて居て、後に發見されるかも知れない處の、或は寧ろ後に發見されるを豫期される處の、根本的に新しき何物もないと認められて、其の一全體に付て體系の立てられることを意味するのである。而して不完結的或は開放的と云ふは、體系を立てんとする一全體は常に發展し創造しつゝあるものにして、既に知られて居るもの以上に、根本的に新しきものが常に創造され或は産出されるのであるが、しかも形式上では根本的に之を知ることが出來ると見て、其の一全體に付て體系の立てられることを意味するのである。要するに完結的或は閉鎖的體系と云ふは吾人が一全體の總ての方面に付て既に少なくとも根本的には完全なる知識を有つて居ることを前定して立てられたる體系にして、不完結的

或は開放的體系とは常に發展し創造しつゝあると認められる一全體隨ふて吾人が完全なる知識を有することの出来ない一全體に付て、其の形式だけは論理的に完全に知り得られると見て立てられる體系である。換言すれば完結的體系は形式上及び内容上の完全を意味するが、之れに反して開放的體系は形式上の完全は意味するが併し内容上の完全を意味しないのである。即ち前者は根本的には形式及び内容の完全なる知識を意味するが、後者は只形式の完全なる知識を意味するだけである。

然るに體系と云ふ思想は本來論理的意識の産出せるものであつて、從來體系と云へば夫れは總てに於て完結的、閉鎖的であること、圓滿具足であることを意味し、將來の發展の豫知されない様なものがあるとするれば、かゝるものに付ては決して體系は立て得られないものと考へられて居た。古來哲學の體系を立てた哲學者は、自分は世界を根本的には知り悉くして居つて、世界の原理には自分の知らない何物もないと云ふ確信の下で、之を立てゝ居たので、而してかゝる確信を有たない哲學者は、敢て哲學の體系を立てんとは企だてゝ居ないと思はれる。然るに世界の原理を知り悉くして居ると考へること、或は世界を根本的に理解して居つて、夫れ以外に世界の理解しやうがないと考へることは、殊に合理主義、唯理主義の固有性であるから、合理主

義唯理主義の哲學者に於て、殊に哲學の體系を立てんとする傾向或は衝動が、強く現はれて居ると思はれる。其等の哲學者は哲學の體系を立てるまでは、自分の哲學は完成しないものゝ如くに感じ、是が非でも體系を立てんとする傾向さへも見えるのである。尙ほ合理主義は唯心主義の方向に於ても亦唯物主義の方向に於ても、其の極端に達するほど、體系構成の傾向を強く現はして居ると思ふ。されば思想界に於て合理主義唯理主義の勢力が大なる時代ほど、體系構成の傾向が強いと思はれるのである。要するに體系構成の思想は主知主義の産物にして、又主知主義とは不可離的關係を有し、主知主義の哲學は完結的體系を立てることを目標とし、又之を立てるまでは安息し得ないものと思はれる。

然るに思想界に於て主意主義が勢力を振ひ、殊に夫れが創造を強調するに於ては、永遠の將來をも知り悉くすと云ふ思想は自から衰へざるを得ない。蓋し創造は常に新しきものゝ産出を意味し、創造の將來を完全に或は完結的に豫知すると云ふことは到底不可能であるからである。殊に創造の特質或は吾人が創造に付て特に興味を感じるのは、夫れが吾人の豫知しない、或は豫知し得ない新しきものを産出すると云ふことにあると思ふ。若し創造の將來或は將來の創造が悉く豫知することが

出來たならば、恐くは創造に對する吾人の興味は大に減弱するであらう、或は消滅するであらう。驚嘆す可き新しき或物の産出と云ふことは、創造の生命である。創造は驚嘆である。

されば主意主義殊に、創造思想が勢力を振ふ時代に於ては、哲學の體系を構成しやうとする思想は自から弱はつてくるのである。隨ふて又何れの事柄に付ても體系を立ようと思ふ思想は衰へて來る。尙ほ體系と云ふことは上に述べし如く、必ず閉鎖的完結的であらねばならぬと考へる以上は、必ず完全なる知識を前定せねばならぬ。即ち或物に付て體系を立てると云ふことは、其の物を少なくも根本的には知り悉くして居ると云ふことを前定するのである。併し吾人は或物に付て既に少なくも根本的には知り悉くして居るので、將來の仕事は只其の詳細を知るだけに止まるものと見るに於ては、學問の仕事は甚だ興味の少くないものとなる。吾人が知らんと欲してまだ知り得ないものがあり、而して夫れを知らんと努力するに於て、此處に學問に活氣が生ずるのである。若し既に根本的には知り悉くして居るものを、只詳細に知るにだけ學問の仕事であると考へるに於ては、學問は全く死んで仕舞ふ。少なくとも全く實用的なものとなつて仕舞ひ、學問其の物の本來の生命はなくなるの

である。又宇宙人生或は世界に付て、吾人は既に少なくとも根本的には知り悉くして居ると考へるは、つまり世界創造力の既に盡きて居ることを前定するので、結局世界を薄平なものとして仕舞ふことになる。之れに反して今日までに吾人の知り得たいけでは、世界はまだ知り悉くされて居ない、又將來世界は益々新しきものを創造すると見るに於ては、世界は甚だ豊富な、深遠なものとなつてくる。而して軌近の思想界の傾向はつまり世界の創造力を強調するにあるのであるから、體系の思想は自から弱はらざるを得ない。否な哲學上に於ては體系を排斥する傾向さへも強まつて居ると思はれる。

尙ほ余は時代の性質と體系思想との間に親密なる關係があるかと思ふ。即ち社會が安定し、静まつて居る時代に於ては、哲學界に於ても一般に體系思想が勢力を振ひ、之れに反して社會が動搖し、進動して居る時代には、哲學界に於ても體系思想が一般に弱はつてくると思はれるのである。是れ體系は完結的なものであらねばならぬと云ふ思想は、本來靜的なものであるからである。而して現代は社會の甚だ進動して居る時代、社會が急速に進動して居る時代である。されば現代の哲學界に於て體系思想の衰へるのは、當然であるかと思はれる。

余は昨年我國の或大雜誌上で我國の今日の哲學者を罵倒する論文を見たが、筆者は今日我國に於てまだ體系を立てた哲學者のないことを殊に罵つて居るのを見て、余は奇異に感じたのである。殊に同筆者がベルグソンが哲學の大體系を立て、居る様に述べて居るのを見て、益々奇異に感じた。今日の哲學界に於ては寧ろ體系排斥の傾向が強いと思はれるので、體系を立てると云ふことは、其の人の知識の淺薄なるを曝露するものであると論ずる人々さへもあるのである。或はかゝる人は妄想狂者であると評する人々さへもあるのである。とにかく哲學者の眞價は其の産出する箇々の思想其の物の價值によつて定めらる可きで、其の人が體系を立て、居るか、立て、居ないかは第二の問題であると思ふ。

併し此處に又注意す可き點がある。夫れ學問の中でも哲學や自然科學は殊にシステムチックな組織的な體系的な學問であると云はれて居る。されば哲學に於ては又體系を無視すると云ふことは到底出來ないと思はれる。しかも體系を以て位階的及び閉鎖的完結的なるものと見るに於ては、或は總て體系は位階的で且つ閉鎖的完結的であらねばならぬと見るに於ては、少なくとも今日の學問的良心を有つて居るものは、かゝる意味にて敢て體系を立てやうとは企だて得ないかと思ふ。そこで體

系の概念其物を改造するの必要が感せられて來たので而して種々なる新しき體系概念が生まれて來たが、余は此等の新しき體系概念をは大體上二種に大別し得られるかと思ふ。其の一は體系は形式上完全にして且つ位階的であらねばならぬが、併し内容上閉鎖的であるを要しないと見るもの、其の二は體系は内容上閉鎖的であるを要しないのみならず、又形式上位階的であることをも要しないと考へるもの、即ち内容上開放的にして形式上並列相關的なる體系を認めるものである。余は便宜上第一を開放的位階的體系概念と稱し第二を開放的並列相關的體系概念と稱したいと思ふ。それで傳來の完結的位階的體系概念を合せて、三種の體系概念があることになると思ふのである。

以上文化價值の一般的概念や、文化價值體系研究の一般の方針や、體系概念に付て簡単に述べたる上で、余は先づ文化價值體系研究の科學的方針の發達を、社會學者の社會理象分類論の發達に付て批判的に考究したいと思ふ。